

徳雲寺所蔵, 颯田本真尼の新出資料

New Records about a Priestess *Satta Honshin* in *Tokuun-ji* Temple

坂上 雅翁*
Masao SAKAGAMI

Abstract

Satta Honshin, a priestess of the *Jodo Shu*, did charity and relief work in many disaster areas from Middle Meiji to Taisho era. Her works may exceed 60,000 but only a few records are left. *Tokuun-ji* Temple in Mikawa, Aichi has valuable records. This is the report to introduce a piece of the research in *Tokuun-ji*.

キーワード：徳雲寺, 颯田本真, E・A・ゴルドン,

I はじめに

颯田本真尼は、明治24年(1891)から大正13年(1925)まで、北は北海道から南は鹿児島県までほぼ全国にわたって地震、津波、火山噴火、大火等で被災した人々へ、34年間にわたり念仏結縁に基づく慈善救済活動を行い、その布施戸数は全国23道府県、6万戸に及ぶ。本真尼が住職を務め、多くの弟子を育成し、慈善救済活動の中心となった三河徳雲寺には、本真尼関係の資料が未調査のまま所蔵されている。

颯田本真尼は自ら実践した慈善救済活動を他の人に伝えることを好まず、記録もほとんど残してはいない。このことから、颯田本真尼について書かれたものは、弟子たちをはじめとする周辺の人々からの聞き書きがその多くを占めている。実際、この徳雲寺にもまとまった記録として残されたものは見られない。ただ、幸いなことに廃棄されず残っていたものもほんの一部ではあるが確認できた。この研究ノートは、所蔵資料調査報告の一部である。

II 颯田本真尼と布施行

颯田本真(さったほんしん, 以下, 本真尼と略称する。1845~1928)は颯田清左衛門の長女として弘化2年(1845)11月28日に愛知県幡豆郡吉田村で誕生、幼名はりつといった。この地は、忠臣蔵で有名な吉良上野介ゆかりの地であり、颯田姓を名乗る人も多く、現在でも念仏信仰のと

* 関西国際大学教育学部

くに厚い地域として知られている。「颯田」という姓は、菩薩の具名である菩提薩埵の「薩埵」からの転訛といわれる。名の通り仏教と縁が深く、出家している人の数も多い。現在の徳雲寺の檀家総代は颯田洪氏を筆頭に、すべて颯田家の一族がつとめている。

本真尼は安政3年(1856)、12歳で三河碧南郡旭村(現、碧南市)貞照院の高橋天然和上について得度、文久2年(1862)に慈教庵(のちの徳雲寺)という庵を結ぶ。現在も徳雲寺の本寺は貞照院で、浄土律^{注1}の流れをくむ律院として三河の中心的存在である。なお、貞照院の本寺は京都法然院で、茅葺きの山門をはじめ佇まいが共通したものを感じさせる。徳雲寺は現在、住職のいない無住寺院であるが、貞照院、檀家総代の颯田洪氏をはじめとする人々により、手入れの行き届いた律院としての雰囲気を保っている。

徳雲寺の立地は渥美湾に近く、かつては塩田が広がっていたあたりに位置する。塩田は豊かな富を生み出し、地元では吉良上野介は名君として讃えられ、忠臣蔵の話は赤穂と吉良の塩を回っての争いであったという。現在、徳雲寺のもより吉良吉田駅は、名古屋駅から名古屋電鉄吉良吉田駅行きの急行の終点となっているが、西尾市を過ぎたあたりから海まで続く平地が広がり、高潮、津波などの被害を受けやすい立地であることがわかる。

明治23年(1890)に三河を襲った高潮^{注2}で徳雲寺が被災する。これをきっかけとして、明治24年(1891)から大正13年(1925)まで、北は北海道から南は鹿児島県までほぼ全国にわたって地震、津波、火山噴火、大火等で被災した人々へ34年間にわたり念仏結縁に基づく慈善救済活動を行い、その布施戸数は全国23道府県、6万戸に及ぶ。一方で、颯田本真尼自身は浄土律の流れをくみ、厳しい修行と清貧をもととし、弟子も多く育成した。本真尼の葬儀の際の追悼文によれば、弟子の数は90余名であり、本真尼の縁戚の者や近隣の農家の娘も多かったが、のちに遠方から弟子入りする者もあった。とくに、細川家などの旧家の奥を預かるものや、公家の女中方の名も見える^{注3}。

明治23年(1890)に三河を襲った高潮で徳雲寺が被災したことが、本真尼を災害への布施の契機となった。翌24年に起こった濃尾大地震^{注4}の際には、徳雲寺の所在する吉良町近辺は当時の震度表示で「烈」、現在の震度表示では震度6であり、徳雲寺の被害も甚大であったことがうかがわれる。その際に、本真尼自身へ寄せられた信者の勧募に合わせ、当時、岡崎の昌光律寺にあった志運和上の信者を通じて勧募したものを罹災者へ施している。また、明治27年(1894)の酒田大震災や明治29年(1896)の三陸大津波の際には、本真尼の受戒の師であった雲照律師をはじめ、目白僧園の夫人正法会の会員を通じて集められた施物を私財とともに被災地へ届けている。

本真尼の布施に賛同した篤志家も、東京の細川家、京都の阪根家、山形の本間家、大阪の泉谷家をはじめ全国津々浦々へと増えていった。雲照律師とは本真尼の実弟、颯田善苗師が弟子になったことから交流が始まったと考えられ、本真尼も自らの弟子とともに雲照律師より受戒している。雲照律師の戒律学校(のちに目白僧園と改称)には十善会と夫人攝受正法会(夫人正法会)があった。この夫人正法会との関係が、のちに本真尼の布施行が全国的な規模に発展する大きく影響した。

明治27年(1894)10月22日午後5時37分、庄内地方は大きな地震に襲われた。被害はほぼ庄内全域にわたり、最上川の河口を中心として最上川本流、赤川、藤島川、大山川の合流点付近の被害が大で、最上川の河口に位置する酒田はとくにひどく、家屋が密集しているうえに、夕食準備の時間であったため方々から火災が発生した。庄内地震とも酒田大地震ともよばれている。

記録によると、当時庄内の全戸18.967戸のうち、全壊3.157戸、全焼12.118戸、死者718人、負傷者808人の被害となっている。

この震災被害に際し本真尼は、雲照律師より受戒後に目白僧園夫人正法会の代理として、救援物資を携え酒田に赴いている。郷土史家の故田村寛三氏は、この時のことを「石巻まで船を使い、それからは陸路で救援物資を山ほど荷車に積んできた。このときは寺町の梨屋漬物店に泊まった。ここのお婆さんが熱心な念仏信者だったことによる」と述べている。これを縁として大正10年頃まで、本真尼は本間家を中心に酒田に招かれ、多い年は1年に7回訪れ念仏結縁の法語を行っている。滞在する期間も長く、1ヶ月に及ぶこともあったという。滞在したのは、本間家のみならず、本真尼の舍利塔がある浄徳寺、脇寺瑞相寺に酒田震災横難死霊供養塔のある林昌寺をはじめ、在家の信者である齋藤家（漬け物の梨屋）、郷土史家の田村家などである。これを見ても、本真尼の布施行は単に施物を届けることに終わらず、布施行を通じての念仏結縁を通じて、一人でも多くの同行を育てることにあったと考えられる。

念仏結縁、布施行を一生涯貫いた本真尼は、久松真一氏の言葉から、後世「布施の行者」と呼ばれる。前稿で指摘したとおり、その理由は、国家的な慈善救済事業の骨格が未熟な時代において、戒律堅固で清貧な生活を送った浄土宗の一人の尼僧が、なんのバックグラウンドも持たずに始めた被災地への布施行が、念仏結縁を通じて多くの篤信の方々の心をつかみ、全国的な広がりを見せたという事につきる。

颯田本真尼の念仏結縁を目的とした布施行は、本真尼自らの情熱と、その清貧・陰徳の姿に対して賛同した、昌光律寺の志運和上、目白僧園の雲照律師と夫人正法会の女性たち、そして東京の細川家、京都の阪根家、山形の本間家、大阪の泉谷家をはじめとする篤志家の人々と、多くの弟子たちによって支えられてきたものである。

矢吹慶輝編『本真老尼』（昭和10年4月25日、慈教庵）、藤吉慈海『颯田本真尼の生涯』（旧版タイトル『布施の行者颯田本真尼』、平成3年12月10日、春秋社）によって本真尼の布施行は世に知られることとなった。本真尼の布施行は、一人の尼僧が個人で行える規模を遙かに超えているが、その業績を資料から裏付けた研究はまだ見られないようである。これは、本真尼自身の布施行が、陰徳を常とし、人に話さず、記録を残さずになされたことに他ならない。

今回の徳雲寺所蔵資料の調査では、布施行の裏付けとなるものを中心に見ていったが、本真尼は詳しい記録を残すことを良しとしなかったことがうかがえた。ただ、それでもわずかに一部の布施帳などが残っており、布施行がどのようにおこなわれたか的一端を知ることができた。

Ⅲ 徳雲寺所蔵資料概観

- ① 本真尼自筆資料
名号短冊



「堪忍」掛け軸



本真尼の真筆として知られているものはわずかである。この二点は徳雲寺に残されていたものを颯田洪氏が表装し直した貴重な資料である。

- ② 本真尼絵姿
颯田本真尼の肖像画。山形県酒田市の林昌寺に同じものが所蔵される。

- ③ 念仏貞本日記
徳雲寺にあった貞本尼の念仏体験を記したもの。

- ④ 月忌帳 1冊
吉良家ゆかりの人々、本真尼の外護者、徳雲寺近隣の人々の月忌帳。

- ⑤ 沼津布施帳



大正2年の沼津大火^{註5}に際しての布施帳。徳雲寺に残されている数少ない布施帳の一つ。布施者の住所、氏名、布施物が記されている。また、まとまった荷物を送る運送会社名を記したものも見られる。各地域の大口の篤信者をはじめ、三河、東京などからの人々の名も見える。

とくに注目すべきは、外国人の名前が一名あり、これについては後述する。

⑥ 泉谷西寿寺布施帳

西寿寺は京都仁和寺近くの泉谷に所在する浄土律の寺院で、本真尼の妹の諦真尼が再興した寺院である。この布施帳は、西寿寺建立にあたっての寄付帳とみられる。

⑦ 四国八十八ヵ所奉納帳 明治6年

本真尼が弟子とともに四国八十八ヵ所の遍路をしたときの奉納帳。

⑧ 徳雲寺参詣奉賀帳

徳雲寺に参詣した、とくに浄土宗の僧侶が記した奉賀帳。多くは名号（「南無阿弥陀仏」）と寺院名、僧名を記している。

⑨ 本尊寄付帳 明治6年

神奈川県鵜沼の本真寺の本尊造像時の寄付帳。

⑩ 鵜沼村本堂寄付帳 明治36年

東京の細川家の懇請により、関東における本真尼の布施行の拠点として建立された神奈川県鵜沼本真寺への本堂建築の寄付帳。土地は細川家より提供されている。

⑪ 大日本旅行便覧 明治35年～41年

明治35年から41年までの鉄道地図。現在廃線となっている線も多く、当時の鉄道網がいかに重要視されていたかがうかがわれる。樺太、朝鮮半島、満州、台湾の路線も記されている。

本真尼はその功績により、国より鉄道のフリーパスを与えられていたとのことで、この線路図はおそらく本真尼が携帯していたものと考えられる。

⑫ 「十善寶窟」 目白僧園

雲照律師の目白僧園の機関誌。⑬が夫人正法会会員の女性を対象にしたものに対して、こちらはすべての会員に配付されたものと考えられる。

⑬ 「法の母」 夫人正法会

雲照律師の戒律学校（のちに目白僧園と改称）には十善会と夫人攝受正法会（夫人正法会）があったが、それぞれ、機関誌として「十善寶窟」、「法の母」を発刊している。この両機関誌には、本真尼と夫人正法会の関係をたどる上で貴重な記事が多く見られ、これまで明らかにされていなかった被災地救済活動が拡大していく過程を確認することができる。

この、両機関誌が徳雲寺に所蔵されていることは、雲照律師と本真尼の関係をうかがわせる。

本真尼は雲照律師を戒律の師として、目白僧園の道場にて弟子たちとともに授戒している。

雲照律師は、つねづね目白僧園夫人正法会の会員の婦人たちへ、「戒律については私の方が詳しいが、布施については本真尼の方が上だ」と話していたという。この目白僧園での受戒を機に、皇族や華族の人々も多く名を連ねた夫人正法会との交流が始まったとみられ、これが被災地救援の規模拡大の契機となったとみることができる。

IV 注目すべき新出資料

資料⑤「沼津布施帳」の中に、外国人と見られる布施者「イー・エー・ゴールドン」という名前が見える。布施帳には、

東京赤坂区氷川町四十五番地 マダム・ゴールドン

ふとん 十枚

窓拭き 九

マク 一

京都東山七條 日吉神社境内 イー・エー・ゴールドン

とある。東京と京都の住所が記されているが、おそらく同一人物とみられる。

大正2年(1913)という年代と、住所(東京赤坂区氷川町45番地は現在の赤坂氷川神社のあたり)から調べたところ、明治末から大正期にかけて日本に滞在し、「仏教とキリスト教の一元」を研究テーマとし、当時外国の書籍が乏しかった日本に英書を送る運動をして、日比谷図書館に英書10万冊を寄贈したエリザベス・アンナ・ゴールドン夫人(1851-1925)にほぼ間違いないという結論に達した。

その後、日比谷図書館の蔵書は太平洋戦争を経て一部が散逸したようであるが現在も「日英文庫」として閲覧に供されている。また、早稲田大学、高野山大学両図書館には夫人の名を冠した「ゴールドン文庫」が伝えられている。ゴールドン夫人は高楠順次郎と交流があり、晩年の6年間を京都で過ごし、亡くなった際、葬儀は京都東寺にて仏式でおこなわれ、高野山奥の院に埋葬された。ゴールドン夫人については、早稲田大学図書館報に掲載された、鎌倉喜久恵氏の解説に詳しいが、何らかのきっかけで本真尼の活動を知り、布施者の一人となったとみることができる。

この研究ノートで取り上げた、徳雲寺に所蔵されている颯田本真尼ゆかりの資料は、一部の存在は知られていたが、その内容を紹介したものは今回が初めてである。冒頭に触れたように、本真尼が、自らの慈善救済事業を人に語ることを好まず、陰徳を積むことに専念されたため、その行動を記録した資料は大変少ないのが現状である。本研究ノートで取り上げた資料は断片的なものであるが、本真尼の救済事業を究明する上で、大変貴重なものであるといえよう。

徳雲寺に所蔵されている本真尼関係資料は、本寺である貞照院、檀家総代を務める颯田洪氏のご努力で保存されており、現在の時点より散逸することはないと思われるが、無住の寺院ということもあり、細かい分類と整理が急がれる。

【脚注】

注1 浄土宗の中でもとくに戒律を重んじる流れをいう。三河地方には現在も律院が多い。

- 注2 前稿で津波としたが、徳雲寺の回向帳を確認した結果、高潮の被害であることが確認できたので訂正する。
- 注3 颯田家の親戚が満州で活躍していた時のこと、颯田家の本家に満州から英文の電報が着いた。誰も理解できずにいたところ、徳雲寺の弟子の中に英文が読める尼僧がおり、親族の危篤を知らせる電報だったことがわかったとのこと（颯田洪氏よりの聞き取り）。実際、徳雲寺には尼僧の私物と思われる数学や物理などの教科書類が多く残っている。
- 注4 明治24年（1891）10月28日午前6時37分、岐阜県美濃地方、愛知県尾張地方を突然猛烈な地震がおそった。最初は上下、水平方向への動きとともに、北、南へ揺れていたが、いきなり大きな烈震となり、岐阜地方気象台の地震計の針は振り切れてしまった。31日までの4日間に、烈震4回、強震40回、弱震660回、微震1回、鳴動15回、合計720回を数えた。その後も余震は絶えなかった。震源地は本巣郡根尾谷（現本巣市根尾）。地震のエネルギーはマグニチュード8.0、世界でも最大級の内陸直下型地震であった。あの記憶に生々しい阪神・淡路大震災（1995年1月17日）がマグニチュード7.2、関東大震災（1923）が同じく7.9であったことを思うと、いかに大規模な地震であったかが分かる。地震の及んだ範囲は西は九州全土に、東は東北地方にまで達した。中でも激震地域は岐阜県的美濃地方を中心に、愛知県尾張地方、滋賀県東部、福井県南部に及んだ。死者は全国で7,273人、全壊・焼失家屋142,000戸という大きな被害をこうむった。（岐阜県 HP より）
- 注5 大正2年（1913）3月3日の大火は、本字出口から出火、東は志多町から西は片端町、南は出口町から北は停車場を範囲に三百町歩を焼き尽くし、1468戸もの住宅が焼失、死者9名、重軽傷者168名を出した。沼津町ではこの大火を契機に道路改良を企図し、市区改正事業を実施、4年（1915）に完成した。（沼寿市 HP より）
- 注6 エリザベス・アンナ・ゴールドンの名を知らぬ人は多いかも知れぬが、日比谷図書館に収められた10万余の「日英文庫」（Dulce Cor Library）の恩恵を蒙った人は多いことと思う。この文庫の創設に力を尽くした人こそゴールドン夫人である。

E.A. ゴルドンは1851年イングランドのランカシャーに生まれた。後にスコットランドの貴族ジョン・エドワード・ゴールドンと結婚、共に名門として知られた家柄であった。ゴールドン夫人はヴィクトリア女王の女宮をつとめるなどしたが、のち、オックスフォード大学に入学、比較宗教学を学んだ。同門に日本入留学生高楠順次郎が居り、その交友が後に夫人と日本を結びつけるきっかけとなったと思われる。

在学中にアジア宗教学に興味を抱いた夫人は1891（明治24）年、夫との世界旅行の途次日本に立ち寄った。この滞在で日本の自然と文化と国民性に魅せられ、帰国後すぐ、創立間もないジャパン・ソサエティに入会し、英国在留中の日本人に何かと援助の手をさしのべ「英国における日本の母」と慕われるようになった。

その後、高楠順次郎らから、日本に洋書が少ないとの嘆きを聞いた夫人は、英・米・カナダの新聞紙上で「英国の文化を日本に伝え、同時に彼我の親善を図るため、日本に洋書を贈ろう」と、図書の寄贈を呼びかけた。日露戦争による日本への関心が強まっていた時期と相俟って、たちまち10万冊に近い図書が夫人のもとに届けられた。夫人はそれを携えて1907（明治40）年再び来日し、高楠を介して東京市に公開を条件に図書の全てを委託した。東京市では、早速整理に要する経費として5375円75銭を議決してその厚志に応えた。

これを機会に夫人は日本に在留し、そのテーマとする「仏基一元」の研究にとりかかった。それは、仏教もキリスト教も元は一つ、同根であることを実証しようとするものであった。8世紀の頃、唐の長安に建てられた「大秦景教流行中国碑」の複製を高野山に建てたのも、その研究の一環であった。研究の成果は新聞・雑誌に寄稿、著書の刊行も数冊に及んでおり、1925（大正14）年には名誉講師として本学の教壇に立ち、「比較宗教学について」「西遊記」などの講演も行なっている。

ゴールドン夫人は大隈侯を深く敬仰していた。侯が自からの邸内に学の独立と自由を標榜して大学を設立し、その門戸を広く開いて、国籍を問わず朝鮮・中国・インドなどの留学生を受け入れ、更に1885（明

治38)年には清国留学生部を設けるなど「見返りを期さない他者に対する献身」が、英国在留の人々への援助を惜しまなかった自らの心情と強く共感するものがあったからであろう。その著書「"World-healers", or, The Lotus Gospel and its Bodhisattvas」(1913刊)巻頭には、そのことを記して大隈侯への献辞としている。

研究に明け暮れる夫人に突然、第一次世界大戦に従軍中の長男戦死の悲報がおそった。夫人は急ぎ帰国するに際して、それまで日本で収集した研究資料、図書約1500冊、仏画・器物約500点を同好の士の研究に資するために、と早稲田大学に寄贈された。大隈侯敬慕の念からであり、大学はこれを「ゴルドン文庫」として記念することとした。

帰国した夫人のその後の動静は未詳であるが、1912(大正9)年には再度来日して、京都ホテルに滞在し研究三昧の日々を送っていたことはわかっており、その間に著書も数冊刊行されている。この来日の折りには夫も既になく、体も弱っていて6年間の滞在中1日も外出することなく過ごされたという。1925(大正14)年6月27日、宿痾の腎臓病が悪化、京都ホテルの一室で生涯を閉じた。74才であった。

旧図書館の象徴として事務所入口(現高田早苗記念研究図書館入口)に立つ一対の羊の像もゴルドン夫人寄贈の文物の一つで仏基一元の一つの証しとなるものであるといわれる。当時建築中の図書館にこの像を置くことは当初からの案であったというが、夫人の没年に図書館の建築が成り、訃報を聞きながら石羊の取り付けを行なったのも、奇しき因縁と思える。

葬儀は京都東寺で仏式によって行なわれ、墳墓は高野山、景教碑の傍らにある。

(鎌倉喜久恵「E.A. ゴルドン(1851-1925)」ふみくら：早稲田大学図書館報) No.38 (1992.12.5))

追記：本研究ノートを作成するにあたり、徳雲寺檀家総代颯田洪氏、颯田本真尼を顕彰するため遺跡を調査されている豊前善光寺菅野真慧浄尼にお世話になりました。感謝申し上げます。